

中学校における授業改善に向けた校内研修の取り組み —教科の枠をこえた取り組みを通して—

学籍番号 17AX009

氏名 古屋 公詳

要旨

本研究の目的は、中学校の教科指導において、教員が協働的になる体制をつくり、授業改善を図ることである。中規模校以下の学校においては、特に、音楽や美術、技術家庭を中心に全学年を一人で担当することもあり、同じ教科のメンバーと対話することはなく、研修機会に格差が生じる。また、ほとんどの教科においては、学年の教科担当が一人であり、相談する相手が学年内にいない。そのため、教材研究や指導法について個人で模索する教員も少なからずいる。つまり、同じ教科の教員だけで授業改善を日常化していくことは困難であると考えられる。

そこで、教科の枠をこえた研究グループを組織し、授業研究会や相互参観を実施することで、教員間が協働的になり、授業改善を図ることができると考えた。

実践結果から、教科の枠をこえた研究グループで事前の指導案検討、当日の授業参観、研究協議をすることによって、授業提案にたずさわる教師が限定されず、全教員が授業研究の学びに参加できた。さらに、他教科の授業実践が自らの授業改善につながったことも明らかになった。全学年を一人で担当する教科や、教科部会がうまく機能していない教科にとっても、協働的になり、自らの授業実践を振り返ることができたことが明らかになった。

また、他教科の実践を知るだけでなく、多くの教員と1つの授業について議論を重ね、お互いの授業観を交わしていく過程をとおして、自分の授業観を再確認したり、再構築することができたことが明らかになった。さらに、それぞれの教科の特性を各教科の教員が知ることで、つながりを持った授業をしていくことができる。そうすれば、生徒にとっても単発な授業ではなく、すべてがつながり、意味のある授業になると考える。

このように、教科をこえたグループでの研究は、教員だけではなく、生徒の学びの視点からも有効であると言えるだろう。